資料

沖縄国際大学創立40周年記念事業／沖縄法政研究所　第33回講演会

「復帰40年」　失望と挫折を乗り越えて

―全軍労闘争から国政へ―

開催日時　2013年３月９日（土）15：00 ～ 16：30
会　　場　沖縄国際大学５号館１０６教室

〔開催趣旨〕

沖縄法政研究所では、本学創立40周年記念事業として「復帰40年」を考える講演会、シンポジウム、研究会などを開催してきました。本事業の締めくくりとして、全軍労初代委員長、元衆議院議員、元北海道・沖縄開発庁長官の上原康助氏をお迎えし、講演会を開催いたします。

これまでの上原氏の歩みは、決して平坦ではなく、厳しい現実と理想の狭間で「苦渋の選択」を迫られつづけました。それはまさしく沖縄の歩みそのものです。上原氏にこれまでの経験と復帰後の沖縄への想いを語っていただきます。この講演会が沖縄の未来を構想・展望する場となることを期待しております。

資料

沖縄国際大学創立40周年記念事業／沖縄法政研究所　第33回講演会

「復帰40年」失望と挫折を乗り越えて

－全軍労闘争から国政へ－

講師：上　原　康　助
全軍労初代委員長
元衆議院議員、元北海道・沖縄開発庁長官

はじめに―「復帰40年」を顧みて

どうもお集まりの皆さんこんにちは。今日は土曜日で、しかもお天気が小春日のような日なので、こういう私のつたない講演に足を運んでくださった皆さんに心から感謝を申し上げたいと存じます。ご紹介を受けました上原康助です。

実は沖縄国際大学の40周年になるということで、私に大学から講演依頼がありまして、私は「既に八十路を超しているから、無理です」といったのですが、「是非」ということでありましたので、お邪魔いたしました。果たして皆さんのご期待に沿うような話ができるかどうか、全く自信はありませんが、今の沖縄の状況なり、日本全体の動向を見てみますと、これでいいのかというお気持ちをお持ちの方々が多いと思いますので、一緒に勉強して、これからの沖縄をいい方向に持っていく、またもう少し沖縄にもしっかり目を向けてやっていくような日本にしていくために、一緒に意見交換するという気持ちで、ひとつお願いをしたいと存じます。ここに飾られているタイトルが非常にいかめしくて、「失望と挫折を乗り越えて」というものです。私はいつも失望と挫折だけしていたから恐らく石川さんはそういうタイトルをお考えになったと思うのですが、なぜそういう気持ちでやってきたかということも若干触れながらお話をしてみたいと存じます。

恐らく私を今日のこの講演に依頼していただいたのは、少し話が前後するかもしれませんが、去年（2012年）の復帰40周年５月15日のときに沖縄県の知事秘書室から「上原も少し挨拶を話しに来れないか」という依頼がありまして、私はもう皆さ

んおわかりのように、あまりいいことを話す人間ではないし、「沖縄県としてはきつい話になるかもしれないが、それでもいいですか」と聞きました。先方は、「いや内容はあなたが考えているとおりでいいから」ということで、「でも時間は４分半か、長くて５分だよ」ということですから、「まあそれはよく考えながらやります」ということでやったのです。ところが、自分でエピソードを追っているとだんだん昔の上原康助の感情が入ってきて、ちょっときつい話になったのですが、やはり私は学もないし、何も人前に出て挨拶できるような柄ではないのですが、考えてみると沖縄が復帰して40年になると。復帰のときに生まれた方々がもう40歳です。そうすると今の50代、沖縄の中枢にいらっしゃる方々にしても40年前の復帰のこととか、いろんなことについてはなかなかおわかりでない面が多いかと思うので、私なりに、ああいう式典ですからあまり失礼なことを言ってもいけない。さりとてただ通り一遍のお世辞ごとだけ話してもいけないと思って、私なりにしたためてみました。

人間はそれぞれの価値観といろんな受けとめ方がありますから、皆さんも画一的には評価をされないとは思うのですが、今日も若い方々もかなりいらっしゃると思うのですが、できるだけ、これからのウチナーはチャースガ（沖縄はどうしたらいいのか）、本当にこれでいいのかについて、ぜひ配布資料にある「資料１」の私が復帰40周年のときに話した内容（「祖国復帰四〇年 沖縄県民は党派を超えた良識の結集を」神山吉光編者『季刊沖縄世論夏季号』閣文社 2012年７月10日）というものを参考にしていただきたいと思うのです。先人、先輩たちに対するいろんな意見や注文等々は多いかと思うのですが、しかし沖縄の戦後を背負ってきた皆さんというものは、本当にご苦労されたのです。他界したご先輩たちもたくさんいらっしゃいますが、大変でした。今のように車は左側、人は右側というような交通ルールでもないし、78年の７月30日、「７３０」で、交通区分も変更したのですが、まだ後遺症というのが58号線とか、329号線とか、そういうところには残っています。そういう点を含めて、ウチナーはチャースガということを考えて、参考にしていただければと思うのです。

だからその復帰40周年のときの私の挨拶にもちろん「クニヒャー（この野郎）」と思っている方々もいらっしゃるかと思うのですが、７割、８割、あるいはもっと多くの人が、「大変感銘を受けました、良かったよ」ということで、私の自宅にも

何十本か電話があったし、今でも「康助ヤー、ヌーシガ、あの原稿カチャガ、ターカラ　トゥラチャガ（康助は、どうしてあのような原稿を書いたのか。誰から渡したのか）」と、ほめているのか皮肉を言っておられるのかと思ったりするのですが、そういう方がいらっしゃるのです。

なぜ私がそういう気持ちになったかというと、先ほど少し触れましたが、あれだけ血みどろに沖縄の本土復帰というものをみんなが努力をしてやったにもかかわらず、基地は依然として、日本全国の約75％、居座っていると。だが、それだけではなくして、最近おわかりと思うのですが、嘉手納空軍基地にしてもいろいろな面で質量ともに強化されてきていると私は思うのです。そういうことについて、やはり我々の年代、もう先が短い年代、昭和一桁、あるいは二桁の皆さんも努力なさるでありましょうが、本当に戦後生まれのこれからの沖縄を背負って立つ皆さんが先輩たちの苦労や気持ちというものに対して、何も真似をしなさいとは言いませんが、参考にしながら、いい方向に持っていくようにお願いをしたいのです。まず、そういうことを冒頭に申し上げて、この資料には当時、沖縄の大先輩の皆さん、1970年11月に国政参加した皆さんというのは、元気なのは私一人なのです。先輩たちはみんな他界してしまった。だが、ここにある資料としては、やはりいろいろ若い皆さんが参考になる面があると思いますので、参考にしていただければ有り難いと思います。

生い立ち

そこで上原康助の生き様というものを少しグワァ（ほんの少し）触れたいのですが、私の生まれは北部の本部町伊豆味です。本部の伊豆味というのは、今は道も上等になって車も通るし、観光客も増えていますが、私が高校に通うころ、まだ「６・３・３」制ではなく、私が高校２年のときに「６・３・３」制に変更になり、２年生に進級するところを、また１年にされて、ユク、アワレサンヨ（もっと苦労しました）。

そして失礼な言い方ですが、うちが貧乏なものだから、名護高校でシタンカイ（下に）されるとか、あの頃は予科練帰りの先輩たちが沢山いて、たばこのばら売りを金は持たさないで、たばこグワァ、コーティクワァ（タバコを買ってこい）と下級生にいつも命令するぐらいの時代でした。それは一つの生き様というか、その時代の生活状況ですから、あまり事を改めてものを言わない、言いたくはないのですが、

そういう時代でした。そこでチャースガヤー（どうしようか）と思って、うちは本当に、配布資料の中にもあるように、恐らく私ほどの貧乏家庭に生まれたのはそう多くはいないのではないかと思うのです。そういうことで高校ヤミーガヤー、チャースガヤー（高校を退学しようかな、どうしたらいいのか）と思っていたら北山高校が分離したものですから、伊豆味のクカルビという山の中から、カシナを超えて、平敷、北山高校まで約８キロから９キロあるのです。しかも山道。グーシグワァ、モチャーニ（棒切れを持って）、ハブが来たらこれで叩くと。しかも今のように靴とか履かないので、下駄グワァハチャーニ（下駄を履いて）、歩いていた時代です。約１年半ぐらい伊豆味の山の中から通っていました。その後、北山高校に寮ができたので寮に入って、何とか高校は卒業できたのです。

軍作業とアメリカ民主主義への疑問

卒業したら今度どうするかといったら、あの頃は軍作業しかないものですから、軍で働いている先輩たちにお願いして、桑江キャンプで測量をするポールマンとして働きました。ポールマンを約７、８カ月、約１年近くやったら、これでいいのかなと思って、今度職場を変わって、だんだん自分なりに夜の勉強に行ったり、いろいろやりながら成長できました。

そして資料にもありますが、私の青春時代に、私が一番気になったというよりも感情を刺激したのは、次のような疑問でした。つまり、なぜウチナーンチュ（沖縄住民）はアンスカ（こんなにも）、馬鹿にされるかということに非常に疑問を持ったのです。本当にお手洗いも別々です。アメリカ軍のはイッペイ（とても）上等。本土から来ているヤマトンチュ（本土の方）たちのものはアメリカ人と同じところもあるし、違うところもあるけれども、フィリピン人、大和から来る日本人はそれなりにある。ウチナーンチュのものはトタン葺きのユグリカーカー（とても汚れている）トイレだった。アメリカの言っているのは民主主義だが、何でこんな人種差別するのだろうということで、疑問を持ち始めたのです。そして同時に、最近、新聞をにぎわしておりますように、少し食事がだんだんアメリカ並みになってしまって、沖縄も寿命というか、平均寿命が大分後退して、女が第３位、男は30位でしたか、というように落ちてきています。これはやはり食生活とか、食、お互いの生活

環境でそういう面になってきている面があると思います。コーヒーショップもない、ワッター（私たちは）、アメリカはご承知のように、今はどうか知りませんが、午前10時と午後３時は必ずブレークタイムといってコーヒーを飲みにみんな行ったのです。事務所のムルイナグンチャーや、ティーグワァーヒチャーニ、ソウティイチェ、イキガンチャー、ユクヤーに、イチョールバーテー（事務所の女性たちの手を引っ張って連れて行くが、男性は事務所に残され座っていた）、これがアメリカの民主主義だということで、私は大変疑問を持ったのです。

これだけではないのです。賃金は同じ仕事をしてもアメリカ人の10分の１、フィリピナ人たちの６分の１、大和から来ている日本人の４分の１か３分の１だったのです。ワッター（私たち）が高校で習った民主主義というのはこんなものではないのではないかと、こういうことに私は疑問を持ち始めたのです。人間は平等で、みんな同じように扱うというのが普通ではないかということを思っていたのですが、そうではないものだから、疑問を持ち始めたのです。まだ1957年、1958年、1960年代ですから、もちろんあの頃はボーナスもない。しかし民間では既にボーナスとか、そういうのは出るようになっていたのです。それで私は私なりに疑問とアメリカの民主主義というものが、こんなにも人種差別をするのかと。沖縄を馬鹿とは言わないが、沖縄をこんなに区別、差別するのかということに疑問を持ち始めたのです。

同時に、沖縄の社会というものの、ご承知のように、1950年代後半からプライス勧告など諸問題が出て、土地問題とか、瀬長（亀次郎）さん、兼次（佐一）さんとか、安里積千代先生、そういう大先輩たちが大きく社会にものを言うようになってきたわけでしょう。そういうものに私たちも刺激をされて成長したのです。1960年代前半までは軍作業に勤めている人は、あの頃は弁当箱グワァ、ティーチヒサギヤーニ（弁当だけを持って）行って、黙々と働いて、黙々と帰るという状況でした。しかしこれではいかんということで、だんだん社会の動きにも刺激をされる。あるいは自分たちでも民主主義とはこんなものかと、おかしいのではないかということで疑問を持ち始めて、成長してきたような気がいたします。

労組結成へ

そして一番私たちが考えたのは、賃金はアメリカの10分の１、日本人の３分の１

ないし４分の１等々で、さっき言いましたように、お手洗いとか、そういった衛生環境、そういう面もみんな区別、差別ですから、そういうことに疑問を持ち始めて、これではいけないのではないかということでした。そこで、軍職場の中に、ＤＥ（沖縄地区工作隊）内で、いろいろ話せる人々と相談グワァ（軽く相談）をしながら、労働問題も少し勉強してみようではないかということになっていくわけです。

その頃、アメリカを中心とする世界的な労働組合の国際自由労連というのがあって、これが1959年に沖縄に事務所ができ、そこの代表と会うことになりました。きっかけになったのは、土曜日だったか、日曜日だったかはよく覚えていませんが、メーデーの前夜祭に行って、軍雇用員の代表ということで私がしゃべったのです。ウヒグワァ（少々）下手な演説をしたら、これがまた話題になってしまって、国際自由労連の代表が「ミスター上原に、会いたい」というものですから、那覇に事務所があったので会いに行きました。そこで、こういうのは皆さんからみるとつくり話とおっしゃるかもしれませんが、私に最初にこのロビンソンという自由労連の代表が言ったのは、「あんたはＯＰＰではないだろうね」と。ＯＰＰとはわかりますか、沖縄ピープルズ・パーティといって、沖縄人民党の略です。

メーデーの前夜祭で話したり、メーデーに行って挨拶をするというのはテーゲーナ（大雑把に言って）あの時分は人民党か左翼系と思うからと「ミスター上原、ＯＰＰではないだろう」というので、私もカッとなって（頭にきて）返事もしないで帰ろうかと思ったが、そこは辛抱だと思って、私は「いやそんなことはない。私は昨日は軍の職場は休みだし、それでしゃべったのだよ」と言ったら、相手は「ああそうか、それはよかった」と言って「じゃあ組合をつくりたいとか、軍の職場の改善の気持ちがあるならば、私の事務所と連携をとりながらやってみようではないか」というものだから、私は「お願いします」と言って帰ってきました。それから職場内で親しい、あの頃は密告されると大変だということで、本当に信頼できる仲間を４、５名とつるみながら広げていって、軍労働問題研究会というものにこぎつけていくのです。

そうしてＤＥで働いていましたが、今は表彰があるかどうか、多分あると思うのですが、４年目と８年目になったら、よく頑張ったといって表彰するのです。私はＤＥで８年目になって、表彰されて２週間ぐらいしたら、「あんたはもう２週間後

はリーフだ」と。首だというわけです。マーカラ、ワジーガ(怒らないでおられるか)。私が「この間、表彰してね、優秀で働いていると、表彰するのに首か」と言ったら、「いやこれは規則だからしょうがない」という返答でした。しかし、私の上司がアルホーシーさんといって、メキシコ系の方でしたが、大変理解のある方で、「そうか、じゃあ俺も少し考えてみるから」ということで、人事部とも掛け合って、２週間を、３週間くらいに延長させて、ポストエンジニア（営繕部隊）のところに、私はトランスファ（配置換え）できたのです。

そこから、「もうこういう状況をいつまでも続けていると沖縄の基地従業員は大変なことになる。もちろんボーナスもない、退職手当もない」ということで、一生懸命、組合づくりに精を出したのです。ここに資料がありますように、ポストエンジニアというのは、沖縄県の北側は奥間から南は知念、佐敷ＣＳＤといって、そこまで営繕部があった。そしてまた宮古・八重山にもブランチがありました。沖縄全体を統括して、2,300名ぐらい従業員の数がおりました。

アメリカというのは民主主義社会でしょう。私も上司たち、上司というか、気心の合うアメリカ人は、「上原、あんた、もし組合とか何かつくるということなら、やっぱりポストエンジニアは、北は奥間から南は知念、佐敷まで分会ブランチが多いから、そこを全部包含して過半数とらないと、アメリカの責任者は認めないというよりも評価しないよ」と言うのです。だから私たちは一番手がけるのは早かった。どこよりも早くつくろうというのは人間の一つの欲でもあるし、ズケランモータープール修理部が第一号だったのです。だが、ここは布令145号といって労働組合認定手続き布令というのがあって、この布令145号に委員長がどうもおかしいと、さっき言うように、ＯＰＰかもしれないということで、認定しなかったのです。それで第一号にならずに、その間に我々とは全然意思疎通もない、監査委員もなかったのですが、民政府が労働組合をいつの間にかつくって、第一号になってしまって、また組合をつくったら、私どもに連絡があって、いろいろあって、全軍労連結成まで持っていくのです。

そういうように大変厳しい状況で組合運動というか、組合結成に立ち上がっていったのですが、アメリカというのはやはり民主主義社会ですから、何でも権力でつぶすということもやりますけれども、筋の通ったことには目をつぶるか、まあしょ

うがないやというように認める面もあったのです。そういう経験をしながら、だんだん全軍労連というものを結成していくのですが、この連合会をつくると、陸軍、空軍、海兵隊、海軍というふうに４つの部隊に分かれているとうまくいかないのです。みんな自分たちの主導権争いみたいに、組合が取り組むものだから。単一組織にしようということで、かなり内部で反対もあったのですが、私がこれはあえて賃金はみんな一緒にしかやらないから、単一組織にしたほうがいいよということで、２年後に単一組織にして、本格的な全軍労運動に発展していくのです。

全軍労闘争の中での苦闘

大変なことがいろいろありました。その間に組合がだんだん強くなって、アメリカの人事部とかは、押さえつけることは無理だという雰囲気が出ますと、この資料にもありますように、思想調査をやる。これは大変でした。要するに嫌がらせというか、牽制です。これをみんな、私はあまり書いて渡しませんでしたが、これでも大変いろいろ苦労しました。そして布令145号というのは労働組合認定決議といって、アメリカが組合の役員、これは全軍労だけではなくして、民間労組もそうですが、民間労組もＯＰＰとか、反日的な人には認可しないというようなことをやっていました。そういうことがありまして、民の労働三法ができたのは皆さんおわかりかと思うのですが、労働三法ができたのは確か58年です。その前に、軍は布令116号というのと、布令145号というのを出して軍雇用員に対しては牽制をしているわけです。

そういう状況もあって、一番軍雇用員が問題にしたのは、ボーナスがないということ。退職手当がない。もう58年から60年代にかけてはどんどん人員整理というのも出たので、一銭も退職手当がないのです。それで私が陸軍の人事部にときどき呼ばれて行って、ボーナスの話をすると、「ミスター上原、あなた方のボーナスはマンスリー・ウェージ（月給）に入っている」と、こういう説明を陸軍の人事部長はやろうとしたのです。ワー、ワジヤーニ（私は怒って）、真っ直ぐ灰皿投げたら失礼になるから、スバカイ灰皿グワァ　ナギヤーニヨ（側にある灰皿を投げつけて）、「何言っているバー（何を言っているか）、あんたは幾ら入っているか、あんたは数字で示してご覧」と言ったら、口をムガムガして、もう返答できませんでした。

そういうようなこともあって、容易でなかったのですが、米軍に対しても、私は今の政治もそういう面があると、私は議員になってからも相当激論もいろいろやりましたが、筋の通ったことに対しては、米軍の良識も働く面が多いのです。何でもかんでも切り捨てるのではないのです。だからそういう点とか、退職手当の問題にしても、最初はこんなのはアメリカにはそういう制度はないから軍雇用員はだめと言われたが、やはり日本の労働慣行、沖縄の労働慣行というものは、これはいくら軍であろうが、アメリカであろうが、なかろうがあろうが、やるべきだということでやりました。

キャラウェイ高等弁務官というのを皆さん覚えていらっしゃいますか。口調、デージナ（大変な）、もうタカ派というか、沖縄いじめもしたのだが、しかし筋は通す人でした。私も向こうからも呼ばれて、こっちからもお願いして会ったことがあるのですが、63年の何月かに軍雇用員にも退職手当制度を実施するということを弁務官が発表して、ようやく軍の職場においても一つの方向性というものが出てきたわけです。それは何と言ってもやはりみんなが苦労して労働組合をつくったと。そしてスト権がないとか、就職手続でいろいろ弾圧、圧迫されても、やりようによっては筋を通せば、米側だって聞くところは聞く。聞かないところは聞かない。そういう筋道をわきまえてやれば、それなりのことはできるのではないかと。こういうことでした。

それで退職手当、ボーナスという話が出たのは、退職手当は第一種雇用員、アメリカの直接軍雇用員については第一種、今はＭＮＣと言っています。第二種にはＩＨＡ、ディネクトハイヤーカー、ＩＨＡと言うのですが、第一種については1952年の４月にさかのぼって、第二種については1963年、12カ年の差をつけられようとしたのです。アンサーニ（それで）、二種の組合エクスチェンジとか、第二種クラブ関係に働いているとか、いろんなそこら辺に働いている方々は、労働組合もなかなか一種のように、私たちがお願いしてもすぐ「はい」とは言いませんでした。だが退職手当が第一種については1952年４月にさかのぼって、第二種は1963年７月１日以降と、12カ年ぐらいの差がついたものだから、第二種雇用員の皆さんはイッペーワジヤーニよ（とても激しく怒って）、今度はワッター（私たち）も組合をつくるといって、それから踏ん張りました。もちろん第一種の私たちも64年から専従だっ

たので、第一種並みに二種雇用員もやりなさいということで、ストライキも打ったりしていろいろやったら、一種並みになって、ようやくいろんなことが一種、二種の関係なくしてできたのです。軍の職場というのは、人に頼る、人にお願いするだけでは物事は進みませんので、そういう意味でやったのです。

日本復帰と国政への挑戦

そしてだんだん沖縄の施政権返還というものが前面に出てきました。そして1970年、昭和45年です。昭和45年に国政参加選挙というのが出てくるのです。私にはいろいろおっしゃる方が多いと思うのですが、ワンネー、ドゥヌ、タケブンソウブン（私は自分の身の丈）は自分でよくわかっているつもりです。だから国会議員になろうとか、国政に出るという気持ちは毛頭なかったのですが、どうしてもということで、結局、出ざるを得なくなったのです。

1970年11月。今は衆議院も参議院も選挙運動は14日ぐらいかな。あの頃は25日間あったのです。宮古、八重山まで一円ですから、大変な時代でしたが、国会にとうとう出させていただいて、私なりにいろんな苦労をしました。本当に自分で言うのも変だが、よう生きているなと思います。前から全軍労がストすると、アメリカが銃剣を押しつけてやっているし、後ろからはAサイン業者が「上原康助クルシェー（殺せ）」といって、「もう全軍労の役員もクルシェー、クルシェー（殺せ、殺せ）」といって大変な時代でした。だから大げさにいうわけではありませんが、私は旧コザ市で約半カ年以上、７、８カ月行けなかったのです。「危ないから、ヤー、アマンカイ行かんよ（君はあそこに行くなよ）」と。ワッターヤーヌ（私の家がある）屋良に電話があって、嘉手納警察署、今の何とかいうレストランがあるところに嘉手納署があったのですが、ウマカラ（そこから、警察署から）直通の伝言がワッターヤーンカイ（私の家に）入れてね、もうお互いが電話して、みんなわからないわけよね。ウレー、デージヤッサー（これは大変なことだ）、１カ月ぐらいしてから、この電話は取ってくれといって、外してもらったのですが。それほど身の危険を感じながらやりました。

だからどうぞ若い皆さん、もちろんくじけたらだめです。そうだからといって、あまり野蛮にしてもいけない。筋を通しながら、万一の場合は絶対、こいつのやっ

ていることは悪くはなかったと言われるぐらいの理論と筋と社会の見方というものを持ちながらやっていったらどうかと私は思うのです。

この70年の国政参加選挙を経て、1971年11月に沖縄返還協定、これは皆さんのこの資料にもありますけれども、強行採決したのです。ちょうど屋良行政主席が返還協定に対する意見書、建議書というものを携えて、羽田空港についた頃、衆議院の第一委員会室、今もよくご覧になられるでしょう、あそこで強行採決したのです。私もその場にいたのですが、大変悔しくて、本当にナチン　ナカラン（泣くに泣けない）、かといって暴力を振るうわけにもいかないし、本当に大変な思いをいたしましたが、そういうことにもめげずに、負けずに、沖縄復帰というものを考えて、復帰記念式典は1972年５月15日に、私と安里先生と瀬長先生は、与儀公園でずぶ濡れになって県民の皆さんとの大会に参加して式典には出ませんでした。

厳しい現実と理想の狭間での「苦渋の選択」

それほど悔しい思いもしましたし、あれこれありましたが、じゃあウンネールビカール　ナイタンナー　ヌーンヤクタタン（このようなことしかできなかったのか、何の役にも立たない）と言われても困りますので、やはり政治は妥協の産物です。筋を通すことも大事です。軍事基地撤去、安保廃棄、ヤンキーゴーホーム、これはイッペイ（とても）言いやすい。誰もが言えることなのだが、これだけを言っていたのでは沖縄の県民世論というか、沖縄の総体をまとめるのはなかなか難しいと思うのです。そういうことも無にはしない、否定はしませんが、やはり政治は妥協の産物でもあるわけだから、聞くところは聞いて、辛抱するところは辛抱してやらないといけない。

私がなぜそういうかといいますと、私ははからずも1993年８月でしたか、細川護熙内閣のときに国務大臣に任命されました。でもそのときは９期目になっているから、なっても普通だといえば、そうなのですが、私のような無学が大臣になるなんて誰も思っていない。だが、大臣になってどうしたかというと、沖縄の社会保障の問題とか、戦後処理の問題とか、６歳未満のマラリア保障などいろんな問題に取り組みました。厚生年金の格差是正なんかも戦後処理プロジェクトチームというものを与党の中につくって、社会党、さきがけ、それと自民党も一緒にやって、退職手

当の問題にしても軍雇用員の退職手当の問題にしても、あるいは厚生年金の格差是正にしても十分ではありませんでしたが取り組みました。

私が大臣を経験し、予算委員長もさせていただきましたから、恐らくこんなことを言うと失礼になるかもしれませんが、沖縄からこれから大臣は先々出てくると私は思うのですが、予算委員長も兼ねてまでやるというのはなかなか出てこないと思います。これは大臣経験者で相当国会における与党だけではなくて、各党とのパイプとか、信頼関係がないと予算委員会というのはなかなかこなせないです。それも非常に勉強になりました。

沖縄には直接は関係ありませんが、原爆被爆者援護法というもの、あれは原爆医療法と原爆特別措置法の二本立てになっていたのです。しかし、当時の社会党はこれを一本化しなさいということで、その都度、改正案を出しても自民党政府と厚生省、今は厚労省がノーと言って全然受け付けませんでした。先ほど言ったように、戦後処理プロジェクトチームというものをつくって、最初の座長は私でした。そういうところで与党の皆さん、野党の皆さん、自民党とも、さきがけとも大論議をしながら、「えー、こうしようや」と。「ここはもう私たち社会党も譲るから、あなた方ももっと聞いてくれ」というようにして一本化しました。さっき言いましたように、政治は妥協の産物です。特に私が良かったと思うのは、加藤紘一さんが政調会長していました。とても物わかりがいいというか、良心的な人で、夜中までいろいろ議論をして筋を立てて原爆被爆者援護法に一本化しました。

沖縄の抱えている問題としては、例えばマラリア問題も、沖縄も全県的にはめようとしたら、とてもではないがだめだということで、八重山だけ入れて、しかも援護法は適用できずに、慰謝料と、あの記念館をつくるということで妥協したのですが、しかし、それでも関係者の皆さんからは一定の評価は受けたのです。厚生年金もそうでしょう、十分ではありませんが、年金というのは皆さんおわかりのように、みんな国が出すわけではないから、本人も出しますから、掛け金は出さないといけないから、私もいくらぐらい補給金出したかな、200万円余り。大体沖縄は300万円から、多い人は400万円も出したよという人もいました。そうして約８割ぐらいの年金額にもっていったと思うのです。

ですからそういうふうに政治というものは、妥協の産物であると同時に、政権を

とれない党は正直いってだめです。いろいろ私は批判も受けましたが、私が書いてある本にいろんなことがあるけれども、やはり政権のとれるような党に脱皮しないといけないと。これは基地撤去とか、安保廃棄とか、アメリカに帰りなさいとか、爆音ももちろんうるさいし、やかましいし、ほんとにメーゴーサータックワーシタイ（ゲンコツをしてやりたい）。だけど怒っているだけでは物事は解決しないのです。自分の筋を通しながら、相手の言うことにも耳を傾けて、どこかで接点を求めるというのが、やはり私は政治の大きなポイントだと思うのです。

今後の沖縄への展望

そういう意味で、そろそろ時間ですから、じゃあこれからの沖縄をどうするかというものにちょっとだけ触れておきたいのですが、今申し上げるように、大変難しい課題が多いと思います。基地問題だけではなくして、あれこれ。だが、やはりオール沖縄で今、オスプレイ、私はあれはオスプレイとは言わない、オチプレイ、落ちる飛行機だと揶揄しているのですが、オスプレイ配備ノーと普天間基地の名護市辺野古移設ノー、この２つを最大公約数にして、沖縄の県民が力を合わせていけば、私は沖縄の未来というのは大きく開けていくと思うのです。

このことによって、保守にも革新にも、そういう良識ある政治家がいるでしょう。そうした人々を大事にして、やはりオール沖縄でオスプレイノー、辺野古移設ノー。あれは（辺野古の米軍基地）皆さん、私は相当勉強もしたのですが、何で今の国会議員の皆さんはそこまで突っ込むのかと気にもなるのですが、あれは名護の大浦湾に持っていくということは、大変な軍港をつくりますよ、でっかい軍港をつくりますよ。潜水艦が入って、いくらでも太平洋に出入りできるようなシステムができると思うのです。そういうことをさせては沖縄は永久に大変です。

ですから、ひとつ今日の講演会で、また後でご質問も、いろいろご意見も言っていただけると、賛成の方もあるでしょうが、そういうふうに沖縄が一つにまとまる。これは必ずしも100％でなくてもいい。７割、できれば８割ぐらい、そういうようなコンセンサスというものをみんなでつくり上げていく。幸い、沖縄国際大学は大分力がついてきておりますので、そういう学識のある先生方がいい知恵をもっともっと提供していただいて、これからの沖縄の明るい展望を切り開いていかれる

ように、特に若い皆さんにお願いしたいです。マキティナランドー（負けてはいけないよ）、ネバーギブアップ。頑張ってください。終わります。

～　拍　手　～

質疑応答

〇質問者Ａ

沖縄は、琉球は、祖国復帰運動をしました。沖縄が永久に日本になるということでいいのか、それとも一時的に日本ということなのか、どっちなのか。将来的には独立したほうがいいのか、それをお伺いしたいです。

〇上原

大変難しいご質問ですが、私も一時、沖縄独立論というものを勉強して、国会の予算委員会で取り上げたこともありました。その時は「上原は、おかしくなっているサー」という人もいました。県民の気持ちとしては、本土政府というか、日本政府が余りにも沖縄を差別、区別するということに対しては我慢ナランサーと（我慢できない）。私は、県民の心の中には、できたら独立でもしようかという気持ちが20％とか、５％程度だという論評はありますが、独立の気持ちはあると思います。私は、やはり沖縄は日本でないといけないと思います。日本を沖縄から変えるという気概を沖縄県民が持つ。それぐらいの意欲と気概を持って、ヤマトンチュンカイマキランド（日本本土の人には負けない）。その根性が最近少し足りないといったら失礼ですが、弱くなっているのではないかと思います。お互いはやはり日本人としての誇りを持って、ヤマトンチュのやり方に対しては文句もつける。ただ批判するだけではなくて、物事の筋を通して、沖縄の抱えている課題を政府が解決に向けて取り組む方向に持っていく。これが一番大事ではないかと私は思います。

〇質問者Ｂ

私は昭和51年に外国から沖縄にやってまいりました。その間の上原康助先生のご活躍を拝見させていただき、先生の大ファンで、非常に尊敬している方のお一人です。私の下手な日本語で質問をさせていただきます。２つのことをお聞きしたいと思っています。

まず沖縄の米軍基地についてです。先ほど先生のお話の中にあったように、沖縄の人たちはオール沖縄にならないと基地問題は解決できないというご意見に私も同じ意見です。沖縄に35年間住んでわかってきたことですが、米軍基地に対して沖縄の人たちは一つにはなりません。米軍基地を認めている県民も少なくありません。それは基地問題の解決に大きな影響を与えていると思います。さらに言えば去年９月９日の宜野湾海浜公園で行われたオスプレイ配備反対県民大会は約10万人が参加しました。一方、翌月の10月７日の那覇大綱引きの参加者は約27万5,000人参加したと報道されました。沖縄県民の安全を守るための大会に10万人、伝統と文化を守るイベントに27万人が参加しました。そのなかの17万人が観光客とは考えにくい。９月と10月の参加者数からみて、米軍基地問題に対する沖縄県民の心の一つの現われと思います。いつまでも一つになれず、まとまることができないと米軍基地の問題は解決できないと思います。そのことについて、上原先生のご意見も聞かせていただきたいと思います。

もう１つは、今沖縄に滞在している外国人たちに対する沖縄の現状です。沖縄の皆さんは私が35年前に来たとき、とても優しく、助けてくれ、外国人でも受け入れようとしていた。しかし、15年前頃から外国人に対して変わってきたように思います。先生のご講演でも差別の言葉が何回も出ました。恐らく沖縄の皆さんは、世界で一番差別のことをわかっていると思います。

私は、故郷よりも沖縄に長く暮らしています。ウチナーンチュになっています。しかし周りの人たちはそうは思わない。外国人だと白い目でみて、差別的です。これは私だけでなく、沖縄に滞在している外国人、研修員や留学生等も同じように感じているようです。そのことについて、上原先生のご意見を聞かせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

〇上原

はっきりお答えできるかどうかわかりませんが、民主主義社会というのはやはり難しいです。それぞれ個人の意見があり、考えがある。政党は政党で自分がやっていることが一番正しいと。自己主張というか、我欲を出すので、県民全体が同じ気持ちになるというのはなかなか難しい。私もそういう経験をし、自己反省の中から先ほど申し上げましたが、ご指摘は当たり前といったら当たり前で、大変ピンポイ

ントをついていらっしゃると思います。やはり（県民一丸となって解決するには）沖縄のリーダーの問題でしょうね。ようやくオスプレイ配備反対ということで県議会、市町村会、それから婦人会、労働団体等々が一つになりました。これを持続的にやっていくということと、今、最も求められているのは、その最大公約数を梃子というか、土台にして、基盤にして、沖縄がまとまるような組織が何らかのチームをつくると私はいいと思います。この間、ある人と電話とかで話してみたのですが、「あんたはもう少し前に出てやったらどうか」「いやいや、ワッターヤー（私たちは）もう遠慮します」と申し上げたのですが、現職の皆さんがそういったリーダーシップを発揮することが大事だと思います。例えば、市町村会長とか、立派な方々がいるし、そういう人々をまた県民が支えていくということがオール沖縄を一つにまとめていく。絶対に一つになるというパーフェクトなものはなかなかないと思うのですが、可能性を私はリーダーの問題と思うのです。

２点目については、沖縄の皆さんももっと外国人の皆さん、沖縄におられる方々と意思疎通を図る、コミュニケーションを大事にしていく。たまにはこういう講演会とか、あるいはディスカッション、意見交換の場を持って、信頼関係を築いていく。やはり外国人の方々が沖縄を知る上でもいいでしょうし、ウチナーンチュがまた外国の皆さんを大事にしたい、知りたいということに役立つと思うので、そういう機会をみんなができるだけ多くつくるということが、ご指摘のような方向にいくのではないかと思います。これは私の感想でもあります。

○質問者Ｃ

先生に１つだけ質問させてください。沖縄の県民性を超えた中で、県民の意識改革についてお伺いしたいと思います。というのは、先生が大臣になられて、これからの日本二大政党という枠組みの中で、当時、先生の先見性に県民意識がついていたのならば、場合によっては民主党政権のときに先生がそれで担っていたかもしれないというようなことを私は否定できないと思います。そういうことを考えたときに、例えば北谷のハンビー飛行場が返還される際は、マスコミには一切載っていません。あのハンビー飛行場、普天間基地に確か統合されたはずなのです。それが普天間基地をなくそうといったときに、もちろん新たにつくるという部分に関しては、当然それは問題があるのですが、今ある基地の中に整理縮小をするという部分に関

して、マスコミはどうして反対運動をして、一番危険度の高い基地の返還が遅れているのか。こういった現状を考えたときに、オール沖縄でいくためには、やはり総論賛成、各論反対というわけではなくて、ある程度のお互いの歩み寄りが必要ではないかと思います。そういうことを考えたときに、県民の意識改革をどういう形で進めていったらいいのか、アドバイスをお願いします。

〇上原

そういうのも規模とか、あるいは程度の問題もあると思うのです。しかし、これは私の意見というか、経験上もそうなのですが、普天間飛行場の移設で辺野古に持っていくということだけはやめたほうがいいと思います。これは今の普天間基地のようなものではないです。核兵器も当然持ってくるであろうし、今でも辺野古の弾薬庫には核兵器は貯蔵されている可能性が高いと私は思っています。私が現職のときに、あぶり出してみたら否定はしませんでした。それから辺野古は太平洋に連なる深海としての港湾上の滑走、活躍ができる道がありますので、そういう面ではやはり大事。大事というより、ウチナーとしては辺野古に持っていくのはいかん。

あなたがご指摘のように、その基地の、例えばヘリコプターの何機ぐらいをどこか既存の基地に移すとか、小規模のものならこれは話し合いによって可能性はあるかもしれないと思うが、規模そのものを辺野古に持っていくということは、沖縄の将来に過重な負担どころか、大変な荷物になると思います。

〇質問者Ｄ

今日は貴重なお話ありがとうございます。復帰運動の中での全軍労運動の役割について、もう少し詳しくお聞きかせいただきたいというのが１点と、それから中南部の米軍基地の返還がもし実現した場合、多くの軍雇用員の方の解雇などがあるかもしれません。私は軍雇用員ではないのですが、友人で軍雇用員の方などもいます。そういった軍雇用員の方々に対して、今後の大幅な基地の整理縮小について、どう考えたほうがいいのか、後輩に対してのメッセージみたいなものをお願いします。

〇上原

たえず頭の痛い問題です。基地の実態については時間の都合もあって省きましたが、資料の中にはある程度入っています。お時間があれば参考にしていただきたいと思います。やはり米軍基地で働いている皆さんというのは不安が大きいです、今

でも。ワッター、アンマンチャー、ワンカイ、康助や、ドゥーヤ、イナントゥル、ムタリンドーと。ドゥーチューバーイスナヨ（私の祖母は私に「あなたは、皆と一緒にしかやっていけないよ。ひとりで先走るな」）と諭されたことがありますが、基地労働者、軍の中で働いている軍雇用員の皆さんも今日も大分いらっしゃいますが、やはり沖縄全体の動きというものを見ながら、首切りをさせない。やる場合はそれなりの手当とか、再雇用、再就職ができるような最大限の相当な方法は考えるということ。これは今の全駐労の皆さん一生懸命努力しておられるし、避けられない面があります。必ずその時代は来ると思います。だからそういうことは、それぞれの皆さんがそれなりのお考え、努力をなさると思うのですが、やっていただきたいと思います。

それから軍の職場のことをあまり誉めなかったかもしれませんが、今の軍の状況を考えてみますと、布令116号とか、布令145号というのは適用されていないわけですから、いないというか、145号はだめなのだが、116号はあっても労働三法適用ですから、そういう面を梃子にして、自分たちの有利になるような法解釈とか、アメリカ側に問題提起をする。またやっていくということが必要ではないでしょうか。だんだん厳しい状況になるかもしれませんが、厳しくなるからといって黙っていてはどうにもなりません。前を向いて、それなりの努力をして、多くの県民や世論の理解を得られるような運動を展開していく。そうすればみんなが力を貸しますよ。一緒に努力すると思いますよ。どうも返答になるかどうか、すみません。

復帰時の全軍労の役割というのは、これは銃剣闘争もあったし、無期限ストもあったし、大変なことが多かったです。そういうことも経験というか、実際にやって、県民の皆さんの協力と理解を得たということが全軍労、全駐労運動の大きな歴史になっています。それをやはり活かしながら、これからもやっていくということ。同じようなことは難しいと思います、これからは時代に即応した知恵というものも出し合って、多くの県民あるいは連合沖縄や各関係労働団体の理解と協力を得るということも必要だと思います。そういった連携というものがいかに大事かということを私は耐えず強調したいわけです。

〇質問者Ｅ

今日は貴重なお話ありがとうございます。私、実は神奈川県からたまたま旅行に

来ていまして、観光客は大体その地域のお土産を買いますが、私の土産は沖縄タイムスと琉球新報、この２つをお土産にして帰ろうと思って買いました。昨日の新聞を読んでいると、たまたまこの講演会があるという記事を読ませていただいて、参加させていただきました。

神奈川県は沖縄に次ぐ基地があるところです。私、鎌倉に住んでいるのですが、隣が横須賀で、航空母艦が、原子力空母が来るという非常に危険なところに住んでいます。先ほどから一つのキーワードのように先生は、「オール沖縄」というお話をなさっていましたが、私はオール沖縄以前といいますか、あるいはそれ以上に、神奈川県も含めまして、「オールジャパン」という運動に展開しない限り、基地返還、あるいは辺野古の移設に反対する運動は、ある意味では成功しないのではないかと思います。その際、基地を県外移設という形では、ある意味では一致するとしても、県外ということは、じゃあどこに持っていくのかということがかなり問われると思います。その場合に、日本国内のヤマトンチュといいますか、日本に持っていけばいいかという議論になってはいないと思います。仮に日本というか、沖縄だけがなぜ負担を受けるのか、本土に持っていけばいいのではないか、という議論がもし出たとすれば、これはオールジャパンにはなり得ないと思います。

ではどうしたらいいのか、先生が先ほどから筋を通さなければならないとおっしゃっていました。この場合の筋は、私見になって申しわけないのですが、やはり安保条約というのが基本にあるのではないかと思います。安保条約そのものに対して目を向けた運動を展開しない限り、オールジャパンになり得ないのではないかと。私はそう思うのですが、先生のご見解をお伺いしたいと思いまして、一言ご質問させていただきました。よろしくお願いいたします。

〇上原

日米安保条約に対するご意見、考え方もいろいろあると思います。しかし、いくら必要性を認めるにしても沖縄にこれだけ基地負担を強いるということはあってはよくないという沖縄県民の大多数の今日的意見だと思うのです。だから私が言いましたように、基地の全面撤去、安保廃棄、あるいはもっと言いますとヤンキーゴーホーム等々を今でもこれは否定をしませんし、そういうことも時と場合によっては必要なのですが、政治の表舞台、裏舞台、あるいはアメリカ側と日本政府、外務省、

防衛省と協議をする。問題をいい方向に持っていくという場合には、話がかみ合わなければ喧嘩しかないのです。だからそういう意味で、日米安保体制についての一定の理解をしながらも、これだけ沖縄側に負担を強いるのはよくない。このことについて日本側も日本の国民も、特によく言われる高級官僚、あるいは政治家が国会議員の諸侯が理解をしてもらわなければいけないと思うのです。同時に、失礼ですが、沖縄の国会議員の皆さんももう少し説得性のある、あるいは筋の通った意見の開陳、問題提起、政策、構想、公論というものをどんどん提起していいのではないかと思います。そこがいまいち少ないものだから、本土の皆さんから見て、沖縄の努力も足りないのではないかというご指摘が出てくる場合が多いのではないかと。これは私の経験も含めて、今のような状況に対する意見ですが、そう思います。

〇質問者Ｆ

私の意見に対して上原先生から何かしら示唆を与えていただきたく、発言させていただきます。

先生のお話の中で、度々、政治は妥協であるとか、今の沖縄のリーダーたちは気迫に欠けるのではないか、という趣旨をお聞きしまして、日常的に沖縄だけが本土からまるで異国扱いされたり、40年経っても日本の一部としてのいろんな仕打ちを受けています。私たちはこれに対して何回も何回も抗議大会を持ったりして、あるいは各市町村の首長も抗議文を持って、日米両政府に訴えていますが、何の効果も上げていないというのが現状だと思うのです。抗議文だけではどうしようもない。堂々と面と向かって、君らはそういうけれども、こうなんだよというふうに強く押し通し言いかえすぐらいの力を持っているのかというのが正直疑問なのです。

本土の人は沖縄の歴史というものをほとんど知りません。日本の沖縄の見る目は、沖縄には「基地が多い」「かわいそうだ」これで終わりです。それでいて観光客がたくさん来て、あっちこっちのビーチで遊んで帰る。私は沖縄の非常にすばらしい、単に一市町村、一県ではなくして、一国の力を持つ文化を持っている。その宝としての文化力は自制力だと思います。自制力がなければ本土の政治家にも官僚にも太刀打ちできないのではないかと思います。私は高齢者に入ろうとしていますが、40、50代の人たちが果たしてどれほど沖縄のおかれている実態とか、歴史とかを知っているのか、私はそういう考え方を非常に注視しています。沖縄の歴史というもの

を私たちはどの程度、自分の子供たち、孫たちに教えているかなと。そういう面について、おこがましいのですが、上原先生のご意見をお伺いできないでしょうか。

〇上原

大変いいご指摘で、今私がお答えした、あるいは話したことも皆さんからは疑問なり、そんな話はやらないのかというお気持ちもあろうかと思うのですが、問題はやはり30代、40代、50代沖縄の中枢を担っている、担おうとしているこれからのリーダーの皆さんが気概を持つべきだと思うのです。私は子供たちや孫たちに、ナーヒン（もっと）勉強しようと言うのだが、オジーとは違うよと聞き流すものだから、コーサー、クワシェチェースガ（拳骨をしようか）。やはり人間というのはいくら親がやりなさい、友達がやりなさい、おじいちゃんがああせい、こうせいと言っても本人がその気になって気概を持ってやらないといけない。ですからこういう講演会とか、あるいはいろいろな会議とか、大会とかが多く持たれて、そこでみんなに勇気と希望を与える。ただ、だめだと言ってはいけないと思うのです。それはやる気を出させるという先輩たちの温かい気持ちというものも持ちながらやっていきたいと思います。今のご指摘のことは、やはりみんながそういう気持ちを大事にしながら、やっていかなければならないし、私もタンチャーグワァ（短気者）で、いつも小言だけ言っていたのだが、最近は人を褒めても怒ることは余りやらなくなりました。相手に希望と勇気を与えて、やる気持ちをどう持たすかということがリーダーたちの一番大事なことではないかと思います。そこをひとつ、特に沖縄国際大学の先生方、関係者の皆さんがぜひご指導いただければ、ありがたいと思います。

～　拍　　手　～

講演会当日は、沖縄市総務課市史編集担当のご協力により、講演会会場受付ロビーにて写真・パネル展も開催しました。

写真・パネル展は、沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリートⅡで開催された「復帰の顔」展（2012年５月15日～８月12日開催）で展示された石川文洋氏撮影の写真の一部をご提供いただきました。ここに記すとともにお礼申し上げます。

【訃報】 上原康助先生は2017年８月６日に逝去いたしました。記してご冥福をお祈りいたします。

本講演内容は、当日の講演の音声データを文字反訳したものをご本人に目を通していただきました。紀要掲載につきましては、ご本人のご了解を得ております。しかし当研究所の編集業務が遅れ、上原先生がご存命中に最終確認ができず、本号での掲載となりました。上原先生のご講演の雰囲気が残るようシマコトバを残し、直訳・意訳をつけ、加筆修正は最少限にとどめるよう心がけました。

紀要掲載が大幅に遅れましたことを上原先生はもとより、本講演会に参加された皆さまに深くお詫び申し上げます。